

Title	ルネッサンス時代の装飾について
Author	辻合, 喜代太郎
Citation	大阪市立大学家政学部紀要. 6 巻, p.77-82.
Issue Date	1959-03
ISSN	0473-4742
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学家政学部
Description	正誤表別ニアリ

Placed on: 大阪市立大学学術機関リポジトリ

Placed on: Osaka City University Repository

ルネッサンス時代の装飾について

辻合喜代太郎

ON RENAISSANCE ORNAMENT

By KIYOTARO TSUJIAI

I

本篇はルネッサンス時代（AD. 14—16）に用いられた建築、及び室内装飾について述べる。この時代には装飾技法も著しく発達し種々の文称主題も使用され、その上歐洲諸国にはそれぞれ特殊な伝統と民族性に依存して錯雑した装飾の変化が見られる。

II

ルネッサンス時代の装飾は古くローマ時代にその起原を求めるべきである。その祖型となったローマ時代の装飾芸術の特質を形成していたと考えられるのはアカンサス葉飾（*Acanthus foliage*）がその大部分を占めていた⁽¹⁾。（第2図）然かもローマ建築装飾に於けるアカンサスの主題の取扱い方は、その表現の大胆さと自由さに於てこの葉飾が最もローマ人の嗜好に適應していたかの様に考えられる。即ち、その主題を見るに小鳥、爬虫類、昆虫等を包含した大形のアカンサスを主題とした渦巻文であり、これは未知の空間を充満する目的に使用され而して主に控壁、パネルに使用されていた⁽²⁾又、葉飾の終末をもった全像又は半身像としてのキメラ、隼、更には常に豊かに装飾された花瓶は左右対称的な配列として又葉飾に使用せられた。Trajan's Forum の有名なアカンサス渦巻文の装飾は 'Soft Leaved acanthus' と呼ばれ標式的な例の一つである。（第5図）アカンサスは古典的な装飾主題として屢々見られる如くその渦巻のロゼット形は花状に且つ放射状に配列された *acanthus-leaves* から形成されている⁽³⁾。（1.3.4図）

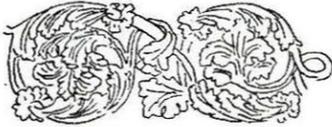
古代ローマの青銅製、銀製品に見られた或種の装飾は AD. 1859 に Hanover の Hildesheim にて発見された銀製の酒杯（*crator*）に見る如くその装飾は特に精巧であり美的なものといえる。更に之等と同一の場所に於て見出された壁画と共にポンペイ、及びヘルキュラナム出土の遺品は吾々に住宅用装飾に関するローマ人の芸術とその技法とを考究するのに都合良い資料を提供したのである⁽⁴⁾。即ち、それは青銅製品を主要な遺品としたがポンペイの発掘品と壁画とはその形式に於て明かにロー



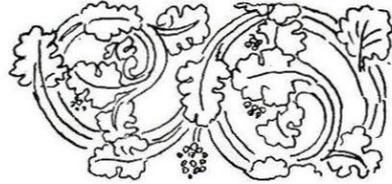
第1図 Greek Anthemion Ornament.



第2図 Roman, Trajan.



第3図 Romanesque church of Saint-Gilles.



第4図 Gothic, Motre Dame.



第5図 Renaissance, Church of St. Mary.

マ的と考えられるが、然し厳密には多くのギリシヤの要素を包含している。このことは一面、ローマ人の愛好した装飾品はギリシヤ芸術家の手によって製作されたが故である。

Titus と Diocletians の Bath 及びローマの Palatine の上にある Caesar の城廓はポンペイのそれ等と同様な怪奇なものを主題として装飾されていた。之等のものがヴァチカンの Loggia を装飾する際に Raphael と彼の弟子達によって大きく進歩せしめたのである。ヒルガホ。果实、面の懸葉、怪奇な形を示した主題、及び小鳥の飛行、更に光輝を放っている渦巻中に入出入する小鳥の主題は凡そ光に基づいた建築的な構成を示し、架空的な特性と風景を主題としたパネル、更に腰羽目、フリース、又壁面に描かれた構図を示している。一般的に之等の装飾に Tempera 絵具⁽⁵⁾ の特質の輝く赤、緑、黄、紫、黒色で着色されている。古代の怪奇な主題は凡そ地下室の壁面に見出された故に "Grottos" と云われ、それは主にギリシヤの主題であった人像と結合した主題であったのである。

Raphael とその弟子 Giovanni da Udine (1487—1561) , Perino del Vaga (1500—1547) はローマで Villa Madanna とヴァチカン Loggia の装飾として架空的な観念を主題として完成している。之等の "Grottesches" の Fresco は又、Tempera を使用した柱頭が多く、白地の上に種々の変化にとんだ光線の鋭い色彩によって描写されている。その装飾の或る部分は大理石粉末にて構図をつくった stucco⁽⁶⁾ の浮彫法で仕上げられ、所々に象嵌が施されていた。Giovanni da Udine 又は彼がかく呼んだ "Ricamatore" は特にこの stucco の作業に秀でた技法を表わした。更に又、動物と小鳥の主題の素描にも優れた手法を見せている。彼と他の秀でた芸術家であった Primaticco, Mantua は 貴族の住宅の装飾に於いて同様な種類によって、巧妙にその装飾的価値を高めている。

Giulio Ramano を援助した作家は Mautua であり、その構図中の主要部分の人像の制作を担当している。その作品はイタリアの装飾の良い例に多数見られ、イタリアと仏国の住宅及び教会に於て、木製、大理石製に於て屢々見出し得るのである。南ケシントン地方に又多くの例が見出され、而して真のイタリア装飾の例は Raphael の描いた控壁と又他の絵画的な装飾の例の中に優秀な模写が見られるのである。之に加うるにルネッサンス時代に描かれた装飾の例として花瓶がある。今ここに引証する必要性とその形式の例としては建築的な装飾を表わしたものが特に注目される⁽⁷⁾。15世紀は 'Quattrocento (1400) といわれた時代であり、広汎に亘って愛好された装飾としては Donatello (1386—1438) によって意匠化された美的な小形の控壁をあげることが出来る。即ち、フロレンスの Baptistery の Ghibert's の青銅製の扉は建築の装飾的な排列を試みた自然的な形式の使用を示したものである。而して壁龕 (Tabernacle) は Cinquecento (1500) 時代の粗野な便宜的と装飾の有している自然的な形式との使用についての進展を暗示していたものといえる。Luca della Robbia (1400—1481) も又 Donatello と共にこの時期に活躍した有能な工匠の一人であった。而して、Briosco とよばれた Riccio は又、ベニス地方の貴族の邸宅の装飾を担当した工匠であった。

Cinquecento (1500) は16世紀の芸術形式に特に附与された名称である。この燦かしい時代に活躍した工匠は十指を超える 数に及んでいる。而して、この時代には多くの古代の記念碑が次々と明かにされ、古代人の美が当時の人々に異様な注意を喚起せしめている。而して、Michal Angelo を初めとしてイタリア芸術家は凡てこれに刺激された結果、古代芸術の理解と彼等の獨創性の發揮に益々努力を傾注せしめたのである。Cinquecento 時代に見られた装飾意慾は Byzantine 形式を踏襲したと考えられた Quattrocento の純粋な芸術から今や全く解放され、古代に存在した優れた何物をも修飾し、凡ゆる方法によって模写されたのである。而してその技法に於ては従来に見ない程度にまで洗鍊さを加へたのである。

Raphael によつたアラバスクとヴァチカンの開廊に見られた装飾は彼の弟子が、その粗野な、不合理に充ちた又不可解な趣味をもって意匠したことに関してはここに若干の酷評を加えるべきであろう。今、全体として之を見るに彼等は怪奇な装飾をもってポンペイ風な不合理に決定的な改良を加えた。而して彼等はその熟鍊した素描力と円熟した技法をもって仕上げ、確かに他と區別しているのである。Villa Madonna と Mantua の貴族邸宅に表わした装飾に於て後世の補正は疑うことなく意匠の不釣合は少なく、その上ヴァチカンの控壁のものよりも更に技法が洗鍊されてはいるが然し、彼等は後者の新鮮さとその描法の氣力とに関しては確かに欠如していたことは争えない事実である。例えば装飾について云われた一弱少な茎は重い塊を支持するのに使用せられるだろう。即ち、薄い弱い茎は恰かも弱い植物の茎の如く描かれるべきであるという真理は常に正しい。而して、樹木の強い枝を表わすために描いたものよりも真に弱く表現している、その上、若しも、薄い茎が重い塊を支持しているならば、強く描かれるべきであろう。而してその装飾に於て欠如した対照の必要性を又附与することに有益と考えられる。而してこの事実は彫刻された作品又は建築形式に於て除外されるが絵画的装飾に於ては一面明かに讚美されるべき事実である。

Cinquecento 時代の工匠達はローマ時代の工匠達より秀でた技術を所持していたと思われる。16

世紀の彫刻的な装飾の例について見るに意匠とその仕上げの技法の巧妙さは正に芸術史の如何なる時代にも優っていたと思われる。表現の方法としてもロマネスク、ゴシック的な怪奇な然かも超自然的傾向は順次消失し正常的な写実的表現を重視したことはこの時代の共通的な装飾理念でもあった。現在の意匠に於いて、所謂、傑出した人々が全くこの理念と同調しないのは寧ろ不思議な現象というべきである。多分、これに対しては疑問の生じないのは当然であろう。勿論、疑問を起さうと考へない。即ちその無限の優秀性を獲得するまでに如何に困難性が根強く作用しているかを見出そうとしなからである。多分、それを製作した人々と共に消失したものであり、何分その形式は安価な野卑なものと考えたからである。然し、これは16世紀の工匠が認識し得なかったことであり、吾々もかかる消失した形式の産出を意識しなかったことに基因している。凡ゆる手段に訴へて、その個有の形式に対して独自性を把握する必要がある。

Cinquecento の時代の装飾に於いて、吾々は植物、動物、又意匠化された対象物—花瓶、燭台、武器—に於て見出し得る偉大な変化は古代の装飾品に表されたものより如何に多く応用されているかに注意すべきである。アカンサス、蔓草、櫻等の葉飾の主題は所謂 *Acanthoid Leafage*、の一般的形式に於て凡そ単純化された獅子、山羊等の動物をも屢々その構図中に表現しているのを見出す。更に又 *Foliated ending* を形成しているある種の構図は極めて調和した花瓶、燭台の形式で製作されていたことを知る。更にロゼットを伴った斜子文様も時には使用された。而してイタリアに於てはアカンサスの主題を要約し、之を又ギリシヤの忍冬文形式の帯状形式に要約したのである。かのベニスに住んだ *Lambardi* 一家は当時のかかる形式を彫刻的に表現した工匠であった。更に *Pietro the elder* (1481) はラベンナの *San Francesco* にある *Dante* の墓を設計した工匠であり、彼の畢生の努力は彫刻的な装飾技法の研究であり彼の息子 *Tullio, Antonio* にその技法が継承されたのである。その作品の主なるものはベニスにある *Santa Maria de Miracoli* 教会の装飾である。特に *Tullio* は一般彫刻作家としても傑出した技法の持主であったと伝えられている。装飾彫刻の分野にては当時の最高地位を獲得した。*Martino Lombardi* は *Tullio* に助力を受けその装飾を完成したという。尚、彼は又、ベニスに在る *scnda disan Marco* を建立した人であり、当時の装飾彫刻の最上の好例は *Corpodi cristo* (1530) の教会にある *Martinengo* 墳墓の装飾に見られた。而してその装飾は *Lambardi* の手法に極めて類似しているが然し作者は現在未知とされている。多分 *Lambardi* に所属した作者のものであると推測して誤りはなからう。

仏国に於ける Cinquecento 時代の純粋を例の一つはパリに在る *St. Denis* であり、*Louis XIII* によって建立された記念碑の控壁に施された装飾である。多分、それは *Jean Just* と *Francois Gentil* によって制作されたものと考えられている。この装飾は人像を主題としたものである。仏国に於ける他のルネッサンス期の装飾形式は '*Henry Deux style*'⁽⁸⁾、と云われたものである。之は主に戸口のパネルに示されたものであり、その天蓋と交錯した作品と楯の主題はこの装飾の特性を形式的に結合した。王の *H* の頭文字と鋭い狩獵神 *Diana* の三日月の腕は屢々当時の楯の主題として使用されていた。この '*Henry Deux style*、は *jean Goujon* と *Jean cousin* によって広く豊族の邸宅の装飾として使用されている。

Elizabeth 時代の装飾は又英国に於けるルネッサンス時代の装飾の一般的形式であり、その特性は Strap-work (紐状装飾) といわれた。而して動物面、ロゼット形の人像と獅子とから構成した怪物、半獣半人像を排列し線形の変形形式と僅かの葉飾をもって構成されたものである。この一例は Old Guard chamber, Westminster (1600) 寺院のパネルに於て見られた。それは又後世に使用された多数の家具と当時の織物に著しく目立って表わされた Saracenic の装飾に強い影響を与えている。又、楯の作品は Jacoban (James I) 形式⁽⁹⁾に於いての様に純粹な Elizabethan 装飾の特性ではなかった。Creme Hall, cheshire に見られた石造の彫刻を施された楯飾は Lngo Jone の手によって制作されたものであるとされた。之がそもそも Jacoban 形式の楯飾の始原となっている。この形式はこの時代に屢々彫刻された木製家具にその最上の例がある。而して、夫等と Elizabethan 装飾は更に多様な変化にとみ、パネルと他の部分の配列は時に平面的に穿孔した表現によつた矩形の strap-work⁽¹⁰⁾ の純粹な形式を構成したのである。それは又、Hardwick Hall⁽¹¹⁾, Haddon Hall 等に施されたものである。又、他の種類は人像と動物とを有した変化性にとんだ曲線なものであり、現在、ケンントン博物館にある外面の old house にその例証を見ることができる。更に他の種類は矩形に彫られたか又は曲線によつて卵形となった宝石の模作と思われた小形のパネルに小形の空間を有した渦巻持送である。

他面、英国にては前述した形式と趣きを異にした古典的な形式としてのイオニア、ドリア、コリント形式の柱、齒飾、卵形、舌状形も屢々使用されていたのであり、主に天井装飾にはパネルと線形とか使用されているのが通例であつた。この点に関しては古典的というよりも寧ろ Gothic 的装飾により酷似していると思われる。

ルネッサンス建築の特性とした怪奇によんだ装飾の若干は又オランダにても盛んに使用され、ある Elizabethan 形式の "Bolt and loch" の典型であつたと思われたものも独国にても盛んに使用されていたのである。

III

要するにルネッサンス時代の装飾に於てその装飾主題は明かに古代ギリシャ、ローマ、更にロマネスク、ゴシック建築に屢々使用させた凡ゆる主題を踏襲していたものであるが、その手法として当時異常な発展をとげた純粹絵画の影響を受けて著しく絵画的主題を尊重したことが特質となり、その上技法に於ても Mosaic, Metal, Glass, 更に Sgraffito といわれたこの時代独得の技法さえ現出するに至つたのである。而して、この時代の装飾は一面主題を超自然的に誇張したゴシック時代と異なつて、自然的な形態に於て主題を表現しようと企図した所謂写實的な傾向が注目される。この傾向は純粹絵画の発展と緊密な関係にあつたことに由来している。

この様な古代ギリシャ以降の装飾主題、技法が一応、建築的構造の発展と相呼応してルネッサンス時代に完成されたものと考えられる。

文 献 及 び 註

- (1) Richard Glazier : "A Manual of Historic Ornament", P25.
- (2) 同上 P26.
- (3) 同上 P13, J. Ward : "Historic ornament", Vol, II, pl. 415. Acauthus は Greek にては主要な裝飾主題となり、その表現は常に平面的である。pl.5.
- (4) R. Glazier : "A Manual of Historic ornament", P.29.
- (5) Renaissance 時代に創始された技法であり、鉱物質絵具を卵黄を媒材としたものである。色調に明るい美しさをもっている。
- (6) 漆喰と同様な技法であり、これと類似した技法に、Sigirafitto. というのがある。これは壁面に漆喰を塗り、その表面に主題を線彫し、その線に着色した粘土をつめて他の部分を掻き落し主題を表現するという一種の造嵌法である。
- (7) Lethaby. : Mediaeval Art, PP.125—129. (1911)
// PP.155—158.
- (8) Henri IV 時代には精巧な浮彩、渦巻文様、紐状文様の裝飾が発展し普及した。特に陶器の文様として、円形、交錯した幾何学的形式文様を重要視した。
- (9) Jacobean 形式は建物の平面と立面に於て規則正しく対称形をもっており、その代表的なものは、Charlecote (1558), Longleat (1567), Kirby Hall (1570—85), Montacute (1580), Wallaton Hall (1580—88) であり、長い Galleries と多くの矩形の窓をもっている。
- (10) Strap-work. 英国に於て好んで一般的なものとして使用されたものであり、植物主題を曲線的に恰も紐状に自由に交錯した様式をいう。
- (11) Hadwich Hall の裝飾主題は狩猟神の Dina 女神とその一族が樹木と葉飾に圍繞かれた情景を表わしたものである。そのフリースは高さ11呎であり、それは低浮彫で構成され、Tempera にて賦彩されている。

SUMMARY

The motif of Renaissance ornament included all kinds of those often used in Greek, Roman, Romanesque and Gothic architecture. But it is worthy to notice that the pure painting, which had developed in the period, had its influence on the technique.

Renaissance technique, moreover, is found in Mosaic, Metal, Glass and especially in "Sigirafitto". The ornament of the period, however, is differed in a way from Gothic ornament (the motif of which is exaggerated supernaturally), and has the tendency of Realism which aims to express natural forms.

Thus, in the period, ornamental technique beginning in Greece was completed with the development of architectural technique.